

第 3 回淡路島観光戦略会議（12/14）における意見等への対応

修正意見①

- ・ 上質なホテルについては、現在でも稼働率 90%を超えているため、新たな顧客層として近畿圏外を取り込む余地がない。
- ・ 観光 GDP を上げることは、宿泊者数を増やすことになる。宿泊者数を増やすことは今の施設数では無理。宿泊施設を増やすことが必要になるが、島内事業者にとっては、競合施設を増やすことになるので、施設増は進まなくなる。

【対応】

既存の宿泊施設の活用を前提として、平日やハイシーズン以外に宿泊者を誘導する方向をめざしていく（【基本戦略(サステナブル戦略)の方向性】◆年間の観光需要の平準化、平日の観光需要の喚起」（資料 4 p24）。

＜考え方＞

- ・ 宿泊施設の休館日や売り止めを含めた稼働率を勘案するとまだ余裕があると考えられる。
- ・ 宿泊者数の実態把握は難しいものの、近年増加しつつある貸別荘等も宿泊者数の増加に寄与している（資料 4 p9）。
- ・ 宿泊施設を増やす前提として、観光産業における慢性的な雇用人財の不足を解消していくことが必要である（資料 4 p13）。
- ・ 滞在を促す魅力的なコンテンツの開発や2次交通の改善などにより、観光地としての魅力が高まれば、民間による宿泊施設の増設につながると考えられる。

修正意見②

- ・ K P I ②宿泊者の発地別比率（近畿圏外以外の宿泊者比率）について、近畿圏外比率 40%は、高すぎる。30~30 数%程度が現実的な目標数値ではないか。
- ・ 淡路島は、もともと他地域と比べて近畿圏比率の高い地域である。
- ・ コロナ禍によって、近畿圏の比率がさらに高まったので、コロナ禍の前に戻って比率を考える必要がある。

【対応】

戦略案・本編（資料 4）「第 3 章 本戦略のめざすところ 4 評価指標」において次のとおり修正を反映（資料 4 p30）。

宿泊者の発地別比率（近畿圏以外の宿泊者比率） 2027 年度目標 35%

＜考え方＞

- ・ コロナが発生してからは、マイクロツーリズムの傾向が強まり、近畿圏以外か

らの宿泊が減少している。今後、観光需要が回復し、近畿圏以外からの宿泊も増加すると見込まれるなか、まずは、コロナ前の比率をめざしていく。

- ・ コロナ以前において、淡路島以上の宿泊客のある観光エリアで、京阪神からの誘客を主としながら、近畿圏でもっとも近畿圏以外からの宿泊比率が高い白浜(36.7%)へ近づくことをめざし、35%とする。

修正意見③

- ・ 現行の戦略では、淡路島のポテンシャルはすごいと書いていた。今回の戦略案では、かなり厳しいことを書いている。他地域と比べてコロナによる落ち込みが少なかった。淡路地域は、いろいろがんばってきたから、落ち込みが少ない。淡路島ならではのポテンシャルをもっと書いていいのでは。戦略本編を大きく変更することはないが、他地域と比べた淡路島のポテンシャルをもう少し書いていいのではないかな。
→前向きな計画とするために、プラス評価をきちんと入れ込むこととする。
- ・ 今回の戦略は、淡路島でなくても言える内容になっている。エッジが消えている。

【対応】

戦略案・本編（資料4）「第1章 現行戦略の進捗状況」 「3 現行戦略に基づく取組等に対する評価」の中で、「(1) 現行戦略に基づく取組と成果」を設け、淡路島ならではの特徴的な取り組み成果やプラス面での評価も要素に加え、全体の振り返りを概括的に記載。（資料4 p8～10）。